

講義・「高機能自閉症・アスペルガーの人への高等教育での支援」からの考察

講師 ゲーリー・メジポプ氏（ノースカロライナ大学教授）

於：平成26年8月23日 自閉症カンファレンス2014

1 ASDの高等教育に関するアメリカでの現状

自閉症スペクトラムの人が進学する機会も増え、高等教育機関における支援の必要性が叫ばれているが、研究者の中でもどの程度の人が進学しているのか実数を把握しきれていないのが現状である。このことは、自閉症スペクトラム研究の先進地・アメリカでも同様であるが、最近、徐々に実情が把握されつつある。ある研究者の報告では、学生の100人に1人の割合（1%）で在籍しているらしいとのことである。

ここで言う高等教育機関とは、アメリカでの高校卒業以降に進学する大学、短期大学、職業専門学校などを言う。それ以前の中学・高校は、中等教育と区分している。

ところで、1%という数値は、一般的な自閉症出現率とほぼ同率で、地域で暮らす自閉症者の割合が、高等教育機関だけに絞っても、この傾向に変わりはないと言える。しかし、アメリカにおいて、自閉症スペクトラムの人のうち、どの程度が進学しているかと言うと、33%、つまり3人に1人は、高等教育機関に在籍しているという驚くべき数値であった。ただし、通信課程や必要な単位だけを補完的に受講している人も含んでいる。

アメリカでは、IEP作成は中等教育機関（高校まで）まで、義務付けられているが、それ以降は、作成されていない。しかしながら、アメリカの障害者支援法では、社会のあらゆる機関で支援することが規定されており、高等教育機関も例外ではない。そのため、多くの大学等では、ディスアビリティーズオフィスを設置し、発達障害に限らず、全ての障害者支援を行っている。しかも、障害別に専門家を配置しており、身体障害であればその専門家、自閉症スペクトラムであればその専門家と。ただ、自閉症スペクトラムに関しては、経験が浅く、その支援も手探りの状況である。

2 高等教育における支援

経験が浅い、高等教育機関におけるASD支援ではあるが、徐々に、必要なことは見えてきた段階にあるといえる。そこには、TEACCHの経験が活かされている。

まず、自閉症としての特性、そして、ひとりひとりの特性を理解していくことで、自ずと支援の方法が見出されて行く。高等教育機関では、全てにおいて自分の判断、責任で教育を受けることを求められている。単位取得にしても、自分でどの講義を取得するか決める必要があるが、ASDの場合、自分の興味関心に偏った取得になる可能性がある。そこで、単位取得に関する情報を細かく伝え、取得の支援を行うことがスタートにおいて求められる。それも、単に卒業するための単位取得のための支援ではなく、自閉症の特性として苦手なことが多い抽象的な内容のものはさけるなどのアドバイスも求められる。面白くない、理解しづらい講義を受け続けることで、苦手意識を強め、失敗体験とならないようにするためには、欠かせない支援といえる。

アメリカでは、大学進学前に準備のための夏季セミナーを6週間から8週間かけて実施するのが一般的になっている。ここでは、ASDの人を対象に、

- ・様々な問題の整理
- ・大学に関する情報提供

を行っている。さらに先進的な事例としては、これに10か月程度追加する形で、大学を受験する

ためのプログラムを持つ大学もある。しかしながら、こちらは、受講者の経済的な問題もあり、このプログラムに関する経費は、入学後の1年間の支援に充てる方が望ましいという声もある。

3 支援の種類

大学における支援としては、

- ①学習面の支援
- ②社会的な支援
- ③自立した生活への支援
- ④カウンセリング・メンタリング

が想定される。

(1) 学習面の支援

学習においては、先に触れたように単位取得に問題が発生しやすい。これは、焦点が狭いために偏った情報の中で、物事を決めてしまうことがあるために起こり得る。大学では、情報がどのように提供されて、どのように把握するのか、すべて個人の責任において実行することが求められる。ASDにとって、最も困難な活動のひとつといえる。しかし、ルーティン化してしまえば、乗り越えられない問題ではないため、最初の1週間で、徹底的に大学の情報提供のシステムを理解し、正しい情報を正しい時期に取得し、正しい判断に結びつけることが重要である。

最近の大学では、情報をメール一斉送信されることが多い。しかし、自分自身でメールチェックしなければ、その情報にたどり着くことはできない。少なくとも、メールチェックはルーティン化しておかなければならない。

また、レポート提出にあたっては、大学側が、「情報処理に時間を要する」という特性を理解し、定型発達の人よりも十分な作成時間を与えるなど、工夫が必要である。講義中のノートに関しても、講義内容のどの部分が重要なのか判別がつけにくい特性があるので、他の学生とノートを見せあい、重要な部分を確認することも求められる。

(2) 社会的な支援

学習面における支援でも、最も重要なのは、ASDに特化した支援でなければならないということである。ディスアビリティオフィスなど、メンターの存在が欠かせず、ASDの学生を面接し、問題を早期に発見し、適切な支援に結びつける必要がある。

大学等での生活において、最初のうちは、講義など問題なく参加でき、好成績であったものが、徐々に成績も落ち、学ぶ意欲が低下することがある。加えて、人とのかかわりの持ちにくさから、外出の機会が少なく孤立するケースがあり、重症化するとうつを発症することもある。専門のセラピストに問題ケースとして相談されたときには、うつの状態が悪く、対応が困難な場合も少なくない。完全に孤立する前に、何らかの手立てが必要と言えよう。

これらの点を踏まえ、高等教育機関へ進学した場合は、最初の2週間で最も重要といえる。この2週間内に、孤立させてはならない。

- ・単位取得など、身近に相談できる存在があること。
- ・興味関心のあることを基に、人とのつながりを持ち、維持させる

「身近な相談者」の存在は、安心へとつながる。その相談者は、同年代の学生であってもよい。その場合は、そのサポーターは、学生生活において、とても重要な存在になり得る。アメリカでは、ベストバディと呼んでいる。このバディは、起こる問題を全て解決させる存在というわけではなく、大

学職員とのパイプ役としての期待が大きい。1、2年生の間は、講義へのサポート役であったり、大学からの重要な情報提供の把握が漏れていないか声かけなど、授業に関する関わりが大きい。しかし、在籍期間中、常に同じバディである必要はなく、生活に応じて、変化するものと考えている。たとえば、共通の趣味によるつながりも好ましく、趣味を通じた仲間意識が孤立防止となる。講義以外の面において、趣味を通じた活動を共有することで、孤立を防ぐことが期待できる。

ベストバディは、学習面におけるノートテイク支援に関しても期待できる存在である。ASDの場合、講義を受講していても、特性から細部にこだわるがあまりに、実は、最も重要な事柄を聞き漏らし、さほど重要でないことばかりに学習を集中させていることもある。講義内容の確認のためにも、他の学生にノートテイクしてもらうことは、講義のポイントを押さえるためにも欠かせない。アメリカでは、低所得の家庭の学生には、大学での仕事を与え、賃金を支払い、学費等をサポートする制度がある。これをうまく活用し、このようなノートテイクも、大学が提供する仕事のひとつとしている。低所得の学生たちが仕事としてサポートすることで、自閉症スペクトラムの学生の戸惑いが減り、しかも、低所得の学生には金銭的なサポートが還元される。そして、これをきっかけに、ベストバディへと発展することも期待される。これ以外に、ベストバディには、兄弟姉妹に自閉症スペクトラムの人がいる学生や障害者支援を目指している学生が担うことが多い。

(3) 自立した生活への支援

学生生活では、自己管理に関して様々な行為を自発的に自立して行うことを求められる。しかし、想像に関して問題のあるASDにとっては、困難なものである。しかし、あれもしたい、これもしたいという気持ちは、定型発達の人と何ら変わりはない。ただ、それをどのように実行すればよいのが、分からないのである。そのため、ひとつひとつの事柄を教えていく必要がある。

恋愛にしても、一般的に相手がどの行為をどう感じるのか教えていかないと、触法行為になってしまう。特に多いのが、好きという気持ちで後をつけ回し、ストーカー行為になってしまうケース。

メンターやセラピストは、どんな特性を抱え、どのような問題を起こしやすいのか先を見通しを持った情報提供を求められる。

(4) カウセリング・メンタリング

特に、健康管理に困難さを持つことが多い。痛みなどを感じにくい特性や、症状をどのように人に伝えるのかその方法が分からないなどの理由から、病気やケガを訴えることができず、重症化することも少なくない。そこで、相談者の方から健康面のチェックを意識しておくことも重要。

4 より具体的な支援のために...

アメリカでは、高校までIEPの作成が義務付けられている。ここには、特性や課題など今までの蓄積された情報がある。これをもとに、次へのステップとして、入学までに情報をさらに収集し、大学等高等教育機関における支援のあり方を検討するための準備が必要である。特に、ASDは、「支援を要求することに困難さを持っている」ことを認識し、支援にあたるべきなのだ。他の学生のように「全てを自分でやりなさい」と言うのは、無理であることを周囲が共通して認識し、「何のために、何があって、どう使うのか」をしっかり説明することから始める。

※とにかく、最初の2週間で、孤立させてはならない！

高等教育機関と言っても、ここがゴールではないことを認識してほしい。あくまでも通過点であり、その先の自立生活のためには、この通過点を成功体験として通ることが重要なのである。

5 Kの事例を通じた考察

(1) 最初の2週間

Kは、現在21歳のF大3年生。入学当手を振り返ってみると、多くの学生がアパートなどに入居すると思われる日より早く入居を済ませ、入学にあたっての支援等について大学との話し合いを持った。事前に連絡を入れ、当初は、大学側も、こちらからの要望を聞く程度にとらえていたようだが、実際には、面談までの間に、独自にASDとは何か、また、どんな体制で臨むべきなのか、大学全体で受け入れを検討してくださっていた。その結果、学部長をトップとして、教授や事務など相談チームが整っており、講義にあったディスアビリティーズオフィスのような存在が整備されていたといえる。

ここでは、ASDの特性を完全に理解するという点には至っていないが、保護者からの情報を聞き入れていただくことができ、「高校までのIEP（Kには中学生のときのものしかない）を活かす」に匹敵する体制だったといえる。

この話し合いでは、具体的な支援として

- ・単位選択にあたっての助言
- ・講義中における視覚的支援
- ・特定の相談者の選定

などを、なぜ必要なのかという点からお互いに確認し、実践していただくこととなった。単位の選択にあたっては、総合大学のため、受講登録システムが複雑であり、必須科目と選択科目、また、教授等の非常勤・常勤など支援体制との連携のしやすさなども考慮し、科目登録のアドバイスをしっかり受けた。また、登録作業は、入学後に所定の時間に、自分ひとりで行うのだが、来年度以降も同様に発生する作業であることから、大学側としては、少しでもひとりで登録することを経験し、自立を目指すべきとの考えで、まず、ひとりで作業を進め、もし、困難な場合は、予備の時間帯に大学事務員と一緒に作業するという方法がとられた。しかし、事前に、本人が何度も単位について担当事務員に問い合わせることができたので、入力作業日までに科目登録の準備ができ、ひとりで作業できたようだった。

ここで、最初の話し合いや科目登録に関するアドバイスにおいて、相談者を選定し、「困ったときには、〇〇さんのところに行く」が明確に位置づけられていたため、安心を得ることができ、キーワードの「最初の2週間」を躓くことなく乗り越えていたようだ。

(2) ベストバディ

入学当初は、「一人暮らし」と「学習」の両立に困難を感じるだろうと予測はしていた。そのため、生活面に困難さを感じないように、ベットや机の配置・小物の置き場の整理整頓など物理的構造化を徹底し、さらには、外出時や就寝時のチェックボードを作成するなど視覚的構造化もできる限り行った。自炊のため、調理に関するオリジナル手順書も作成し、事前に家庭において長期間にわたって調理を体験し、経験値を増やした。

(1)における学習面の支援が整い、さらに、一人暮らしの面においても不安要素がさほど存在しない中、同年代とのかかわりが持てるのかが、不安要素であった。

しかし、本人は、長年の夢であった音楽活動を実現させようと、軽音楽のサークルに入会する気持ちが強く、入学早々、サークルに加入したようだった。バンドを編成するまでには至っていないが、音楽を通じて、仲間意識を高めることができたように感じる。ここでは、バンド編成ができなかったため、自分の音楽技術を高めようと練習したり、大学外でのバンド編成の仲間を募ったり、他のサー

クルに移籍したりと、自分の社会性を高めながら、人とのかかわりを深めようとしている姿が見られた。やはり、興味関心が強い事柄は、自己啓発に大いに力を発揮するものと感じる。

結局、Kの大学生活において、ベストバディといえる存在があるのか、ないのか、その点は把握できないのだが、少なくとも、様々な方々と出会い、その中で支えられながら、充実した学生生活を送っていると感じる。

(3) 社会的な成長

また、音楽活動を続けるためには、楽器購入など金銭的な課題も多い。そこで、アルバイトを始めている。何度も面接による不採用を体験し、最近では、「アルバイトとして求められるのは何か」という点を考えながら面接を受けているらしい。また、アルバイト先の判断で雇用止めを体験し、自己嫌悪に陥っていたが、それをサークルの仲間から元気づけられていた。さらに、仲間から登録制のアルバイトを紹介してもらうなど、人とのかかわりの中から情報取得につながっており、社会的な成長に発展している。

これらアルバイトの職歴も、新装開店前の準備作業・コンビニ・デパート地下店舗・コールセンター・倉庫内作業など多岐にわたっており、ある意味での職場体験になっており、通常では見ることができない部分での仕事を自ら体験することで、職種等を情報誌だけでは実感しにくい特性をカバーしているものと思われ、今後の就職活動に良い影響を持つと考えている。

(4) 今後への視点

講義にあったように、大学などの高等教育機関での生活は、長期的な目標・自立生活をゴールとしてみれば、通過点にしか過ぎない。今まで、中学校や高校を、やはり通過点としてとらえ、この通過点を実り多い成功体験で通過させたいと願ってきたが、同様に、大学も通過点であるが、成功体験をもって通過させなければならない。それは、学習面だけではなく、人の出会いなど通じて、社会性を高める期間とも感じる。現時点において、Kの場合は、偶然にも、最初の2週間をクリアし、ベストバディ的な仲間とも出会い、実り多い時間を過ごしているようだ。今後、その経験をどのように就職活動に活かしていくのか、就職に関する情報を収集しながら、次のステップに向かって行かなければならない。

また、今回の講義内容とKの事例はリンクしている点が多く、より多くの方々の参考になればと考える。